

皆さん、おはようございます。今日やっと2021年度の最初の凝念ができます。そこで、凝念のことを少しお話します。凝念は元々、成蹊学園を創立された中村春二（はるじ）先生にさかのぼります。凝念は中村春二先生が、1912（明治45）年4月池袋に現在の成蹊学園を創立すると同時に、生徒たちに日々行うように指導した精神集中法です。「凝念」という名称は中村春二先生が命名しました。その目的はその名のとおり、念を凝らす、つまり精神を集中する行為です。静座（椅子にかけても、立ってもよい）し、手を組み、目をつぶり、呼吸を整え、精神を丹田に気を散らさずに集中します。また、凝念によって生じる平静にして素直な心の状態を、さらには心の集中・持続する状態を、生徒たちが指導を受け入れるべき「心の門」が開かれると表現し、教科指導の目的は、知識・技能の習得にもあるが、むしろそれらの教科指導を通して精神を統一し、集中・持続する習慣を養うことが重要であるとしました。つまり、教育の基本的なあり方を、精神を練磨し、優れた人格形成することを最優先されたのです。

この凝念が、何故、明星で行われているかをお話します。明星の創立者児玉九十先生は1888年（明治21年）今から133年前に静岡県三島に生まれ、東大文科哲学科卒業後、今の成蹊学園に就職され、若くして成蹊学園の中心的存在として中村春二先生の片腕として活躍されていました。その児玉九十先生が実業家星野鏡三郎という人物に出会い、明星を創立することになります。児玉九十先生は明星の教育の根幹を、明星の生徒は「理想は高く、行いは一歩より」を目指す人間力の養成におかれ、精神修養の凝念は明星創立当初から導入され、今日まで100年近く

続いているとても貴重な伝統です。明星の創立当時、成蹊から明星に寄付されたのがこの鐘です。凝念で精神集中したあと、皆で音読する「心力歌」は、人格を形成する一手段として成蹊で始められたもので、そのまま明星が引き継いでいます。「心力歌」は、生徒たちに自分の心の奥底にある「尊い心（＝正しい心）」を気づかせるために作られました。「心力歌」を音読することで、少しずつ「尊い心」の存在を気づくように導かれています。

例えば、「心力歌」第1章の冒頭を見てみましょう。「天高くして日月懸かり、地厚うして山河横たわる。」は、私たち人間が生まれ暮らしている宇宙の大きさと、この地球の自然の偉大さを表現しています。「日月の精、山河の霊、鍾りてわが心にあり。高き天と、厚き地と、人と対して三となる。」は、私たちは宇宙と地球から不思議な影響を受けて存在している、世の中のは天・地・人が三位一体となって成り立っているという意味です。「人無くしてそれなんの天ぞ。人無くしてそれなんの地ぞ。」は、「三位一体を作る天と地は人がいて初めて意味をなす。つまり、人が尊い心を持っていな天も地も役にたたないで、何事も成し遂げられないという意味です。戦国時代、織田信長は「天の時、地の利を得ながら、人の和がなかったために天下統一を成し遂げることが出来なかったと言われています。私たちは人として「尊い心」を持つことが一番大切なのです。皆さんは、凝念の時間だけでなく、時々「心力歌」を音読して、「尊い心」の大切さに触れてみて下さい。

では、どのようなことをすれば「尊い心」を身につけることが出来るのか？

児玉九十先生は、「凝念は、授業時間の時、スポーツの時、すべてその場で、精神

を統一して取り掛かるのでありますから、凝念は随時随所に（いつでもどこでも）行うのであります。物事を一生懸命にやる、一心不乱にやること、それ自体が凝念なのであります。」と述べられています。つまり、皆さんが明星での全ての学び、全ての取り組みに、「健康で真面目に努力する」ことそのものが凝念であり、「尊い心」を養うことになるということです。

皆さんは、縁があって明星で学んでいます。明星で学ぶ意義は、皆さんが大学に入るために明星で6年間学ぶということではありません。大事なのは、皆さん一人ひとりが、明星で学ぶことの素晴らしさを感じ、明星だから学べることに健康で真面目に努力することで、自分自身を成長させ、人生の基礎を築くことです。。明星教育の大きな特徴の一つは、目に見える教育と目に見えない教育の両方を大切にしていることです。もう一つの柱が「心の教育」です。3年生は残り4年弱、1年生は6年弱、皆さんは、全てのことを一生懸命やって凝念という明星の伝統つまり「心の教育」を自分のものにして下さい。そそうすることで、皆さんの人生の基礎を築くこととなります。以上、本日の校長講話とします。